

-----趣旨説明-----

◆大シンポジウム「世界史教育のなかのアメリカ史」

2006年のいわゆる世界史未履修問題がよびおこした懸念のひとつは、歴史教育の空洞化であった。教室において、歴史はしばしば受験のための暗記作業とみなされ、世界を理解し世界に関与するための知とは受けとめられていないというのである。

こうした事例は、歴史学的思考とは何かを再検討され提示され直すべきことを示唆していよう。狭義の教育現場にとってのみならず、歴史の探求が過去についての情報以上の何なのかが、問われているからだ。そして、大学や高校の教室は、その歴史学的な思考の実践と検討の場として中心的であるに違いない。当シンポジウムが、歴史教育を討議の中心に所以である。南北アメリカ史研究の成果を教育の現場にいかにか「下ろすか」といったノウハウ論にとどまらず、制度、思想、そして現場での試みといった多角的視点から検討を加えたい。このシンポジウムが、歴史教育をめぐる課題について当学会が継続的に取り組むための出発点になるのを祈念している。

(運営委員会 担当：松原宏之)

-----

◆シンポジウムA「19世紀前半の西半球秩序」

西半球世界の秩序をどのように構築するのか、この問いは現在に至るまで重要性を失わない大きなテーマであり続けています。そこには、南北アメリカ世界の共通性とは何か、という理念的課題だけではなく、各国がお互いにどのような軍事・外交・経済的関係を構築するのか、という現実の制度構築の諸問題も含まれます。また、域外の国家や勢力との関係構築という対外的な問題も無視することができません。

今回のシンポジウムでは、そうした秩序構築の諸相について、19世紀前半に絞って具体的に検討することを目指します。この時期にはすでに独立していたアメリカ合衆国に加えて、中南米カリブ地域に続々と独立国が誕生していきますが、そうした国家群は旧宗主国をはじめとするヨーロッパ諸勢力との関係だけではなく、新興国同士、あるいは残存する植民地との関係を新たに構築する必要に迫られました。いっぽうで、ヨーロッパ諸国の側にとっては、南北アメリカの新興国や残された植民地との関係構築は、旧来のヨーロッパの域内秩序を越えたより広い国際秩序の形成という大きな課題をも含むものでした。簡潔に言うならば、19世紀前半という時代は、一度崩壊した旧来の国際秩序を、全く新しい条件下で構築しなおしていくという、大きな挑戦の時代であったと言えます。

しかしながら、この時期の秩序は、具体的な個別の交渉を積み重ねる過程で、幾多の変更を被りながら、おぼろげな全体として次第に析出していくものであり、各国の事情や思惑、その時々具体的な状況によって大きく左右されるものでした。したがって、19世紀後半以降に顕著になる「汎アメリカ主義」のような全体的な理念に基づいて構想されたものでは必ずしもありませんし、ひとつの国の立場のみを検討するだけでは不十分です。

以上のような理解にもとづくならば、西半球秩序の理解をより豊かにしていくためには、対象とす

る地域や国の異なる研究者が集い、それぞれの具体的な状況についての情報交換をおこない、共同で討議することがどうしても必要になります。本シンポジウムはそうした必要性を認識して企画されたものであり、アメリカ合衆国、ハイチ、スペインという互いに異なる地域の研究者に報告していただき、旧スペイン領アメリカ側からコメントを交えながら、秩序構築の過程を複眼的に理解する枠組みを模索していく所存です。もとより、理解を深めるためには、報告以外の地域の事情をより広く知ること、さらにはそれぞれの国についても多面的に考察することが不可欠ですから、報告者・コメントーターにとどまらないより開かれた議論が必要です。活発な議論が交わされるよう、さまざまな分野の研究者に幅広くご参加いただくことを心から願っております。

(運営委員会 担当：伏見岳志)

---

◆シンポジウムB「南北アメリカにおける移民コミュニティの生成」

国境を越える人の移動への関心はますます高まり、一国史的な枠組を相対化し、領域横断的な歴史を記述する方法が模索されている。当シンポジウムでは、南北アメリカの各地域において、移動する人々の生活世界を構成する移民コミュニティを取り上げる。移民コミュニティは、共同性を前提とした均質な存在ではなく、移動する人々の流動的な生活経験が交錯するなかで立ち現れると考えられる。そのような局面を、歴史研究としていかにとらえることができるのだろうか。シンポジウムでは、移民のコミュニティが様々な歴史的局面においてそのかたちを現す「生成」の諸相を、環大西洋世界におけるイタリア人移民、南カリフォルニア地域社会のなかの日本人移民、カリブ海地域における越境移民といった事例研究にもとづいて検討する。そして、人々の移動とその流動的な営みを描く歴史研究の可能性について議論したい。

(運営委員会 担当：南川文里)

---

以上